

人工草地による乳牛雄子牛放牧育成試験

高杉晋介・小坂幸吉・藤川高範・吉田直治・真島清
(長崎県島原畜産センター)

TAKASUGI, S., OSAKA, K., FUJIKAWA, T., YOSHIDA, N. and MATORI, K.
Experiment of Rearing on Pasture in Dairy Young Bulls

パヒヤグラス人工草地にホルスタイン雄子牛を放牧し、夏枯時における生草の利用性と省力管理について試験し、その成績を得たので報告する。

1. 試験方法

- (1) 供試牛：ホルスタイン雄子牛 6 頭 (試験区 3 頭 対照区 3 頭)
- (2) 飼養管理：日本飼養標準により生後 6 ヶ月齢まで舎飼いを実施、以後放牧区と舎飼区に区分
- (3) 放牧方法：面積 32.4 アールを 1 牧区 8.1 アールとして 4 区分、3 ~ 9 日間隔で終日輪換放牧を行なった。
- (4) 放牧期間：昭和 41 年 4 月 27 日 ~ 10 月 31 日の 188 日間

2. 試験成績

各区 8.1 アール当坪刈収量最高 1073.2 kg, 最低 265.7 kg, 合計 18,385.9 kg, うち乾草 735.8 kg の調整を行なった。

3. 考 察

(1) 夏枯時における草生、喰下状況並びに牛の発育状況から今後パヒヤグラスに期待が持てるが、早春の萌芽生育が雑草より遅いので早春収量の期待できる他牧草との組合わせを検討する必要があると考えられる

(2) 7 月中旬以降の異常乾燥と高温気象で夏枯れ秋落ちの傾向が 8 月下旬以降見られる点から放牧牛に対する濃厚飼料給与の検討が必要と思われる。

(3) 増体量は両区に差は見られず、全期間を通じ試験区がやや良好であった。

(4) 労働時間は試験において対照区の約 27% で省力管理面からして良い結果を示した。

(5) 所要経費では試験区は対照区の約 62.7% であった。

(6) 粗飼料費で試験区が多かつたのは、雑草繁茂し除草剤の使用及び除草労力を多く費したためで、草地造成にあたり雑草を考慮する必要があると考える。

(1) 放牧牛の行動

回数	採食	反刍	休息	徘徊	移動
第 1 回	379分	242分	579分	15分	43分
第 2 回	447	504	455	17	17
平均 (%)	413 (28.6)	378 (32.2)	517 (35.9)	16 (1.1)	30 (2.2)

(2) 投下労働時間

対 照 区		試 験 区		
作業別	時間 労働比率	作業別	時間 労働比率	
飼料給与	8084 27.2	飼料給与	1880 23.4	
管 理	手 入 入	12784 43.0	除 糞	1751 21.9
	敷料搬出入	6016 20.3	掃 除 刈	1752 21.9
	そ の 他	2820 9.5	乾草調整 (施肥を含む)	2625 32.8
計	29704	計	8008	
1日当労働時間	158分	1日当労働時間	43分	
1日1頭当労働時間	52分	1日1頭当労働時間	14分	

注) 対照区飼料給与は刈取から給与まで試験区飼料給与は濃厚飼料乾草給与

(3) 放牧試験草地生草収量

(4) 体 重 増 体 状 況 (kg)

期 間	区 分	試 験 区	対 照 区
全 期 間 (1日平均増体量)		302.0 (0.782)	290.3 (0.759)
	放 牧 期 間 (1日当平均増体量)	125.0 (0.665)	125.0 (0.665)